

利尻町

松田 隆之

1.利尻町の概要

1.1 地名の由来

「リイシリ」(高い山のある島の意) に由来する。

1.2 利尻の歴史

利尻島には旧石器時代から人間が住み始めていたといわれている。5～6 から 12～13 世紀にかけてサハリン・北海道北部とオホーツク沿岸地域に発展したオホーツク文化の遺跡が最も多く発見されている。文化 4 年(1807)にロシアの戦艦が利尻島を撃破する事件が発生し、幕府に北方警備を命じられた会津藩はこの島に約 250 人の藩士を派遣した。そして、対人中病死する者が多くを数え、その墓石は今も本迫に安置されている。以来、北方の調査が行われるようになり、利尻島の様子が文書や絵図などで残された。嘉永 1 年(1848)利尻富士町・野塚の海岸にアメリカ青年のラナルド・マクドナルドが上陸した。幕末から栄え、明治になって小樽経済圏などと交流し、昭和 49 年国立公園に指定された。

以下、利尻町の誕生についての年表をまとめておく。

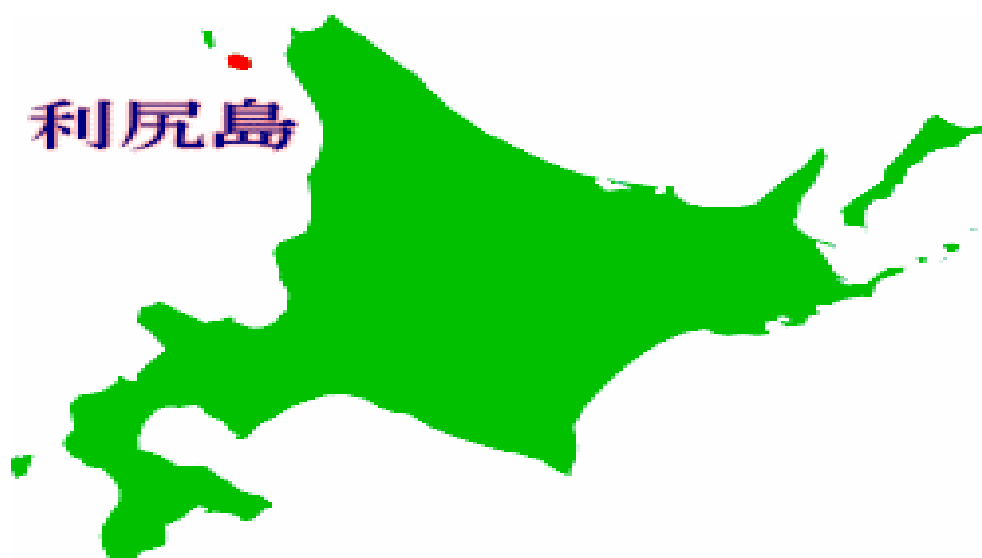
- 1899 年 沓形村戸長役場が開庁する。
- 1900 年 仙法志村戸長役場が開庁する。
- 1902 年 沓形村と仙法志村に、二級町村制が施行される。
- 1924 年 沓形村に一級町村制が施行される。
- 1949 年 沓形村が町制施行される。
- 1956 年 9 月、沓形町と仙法志村が合併、利尻町となる。
- 1999 年 利尻町開基 100 年記念式典が行われる。

1.3 地理・気候

利尻島は、北海道北部、稚内市の南西方 40 キロメートル、礼文島と並ぶ日本海中の火山島である。北海道の西北端日本海上に位置し、北緯 45 度 15 分、東経 141 度 20 分となっている。北は、北西 9・7 キロメートルを隔てて礼文島が指呼の間にあり、東は、利尻水道を挟んで北海道本土と相対し、最短距離は稚内市オンネトマナイ川口付近で、約 19・1 キロメートルとなっている。地勢は険しく、山と海にはさまれた海岸に集落が点在。 北部の沓

形（くつがた）南部の仙法志が主要な集落。面積は 76.49km²。気候は春、春先は比較的好天の日が多く、気温も急上昇する。日照時間も最高となる。風向は暖かな、南西、南南西の風がもっとも多くなる。夏、6 月、7 月には霧の発生が最も多い、しかし、道東とは比較にならないくらい少ない。秋、低気圧や、寒冷前線の通過で、雨量も多く、また強風も多く吹き、過去には竜巻が発生し人、物的に悲惨な被害があった、秋の期間は短く、夏から急速に冬になる感がある。冬、北西の季節風も多くほとんど毎日ように風雪がある。積雪は場所により異なるが、吹雪のため 4～5 メートルに達する事もある。1 月から 2 月の平均気温は氷点下 5 度内外で、最低気温は氷点下 11 度位である

図 1 利尻町の位置



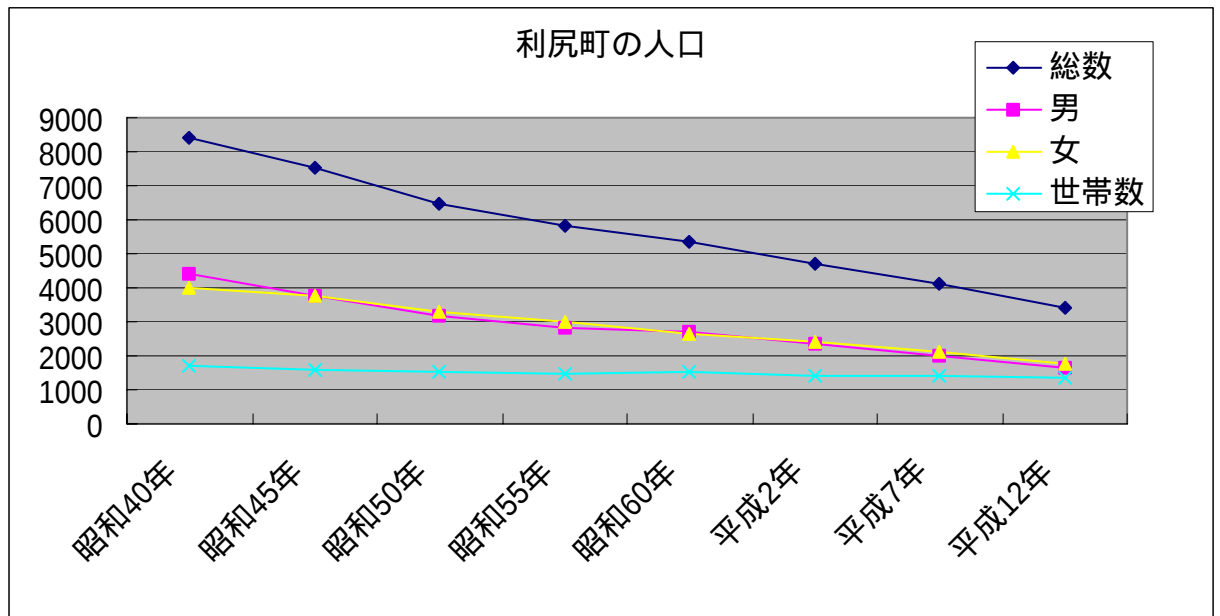


2.人口・世帯数推移

利尻町における人口の減少は、図 2 から判断がつくように深刻な問題であるといえる。「総数」は昭和 40 年から平成 12 年までに、約 60%減少している。その主な理由としては、人口の都市部への流出、そういったことから起きる仕事の減少が更にその状況に拍車をかけているように思う。「仕事がないので都心へ→人口減少→人口が少ないから仕事減少→さらに仕事がないから都心へ」といった具合にことがすすんだのではないかと私は思う。

私が驚いたことは、「世帯数」の減少率が 20%ほど(昭和 40 年から平成 12 年まで)であるということだ。意外にも少ない。「総数」の減少量は、4986、「世帯数」の減少は 338。計算すると、1 世帯減少する毎に 14.75 人減少することになる。14、5 人家族というのは、昭和 40 年でもたやすく見られるような訳でもない。私が推察するに、高齢者が町には多く存在し、その子供である若い世代が町を離れていくのであろう。こういう場合であれば、「世帯数」は維持され、「総数」は減少する。また 1 世帯あたりの出生率の減少なども、「総数」の減少の割に、「世帯数」の減少は少ないという事態の原因となっている。人口減少という波を、この町も例に漏れることなく、受けている。

図 2 人口・世帯数の推移



	総数	男	女	世帯数
昭和 40 年	8403	4395	4008	1719
昭和 45 年	7553	3765	3788	1591
昭和 50 年	6485	3187	3298	1538
昭和 55 年	5828	2847	2981	1466
昭和 60 年	5352	2678	2674	1504
平成 2 年	4714	2326	2388	1421
平成 7 年	4104	2005	2099	1403
平成 12 年	3417	1634	1783	1381

3.産業

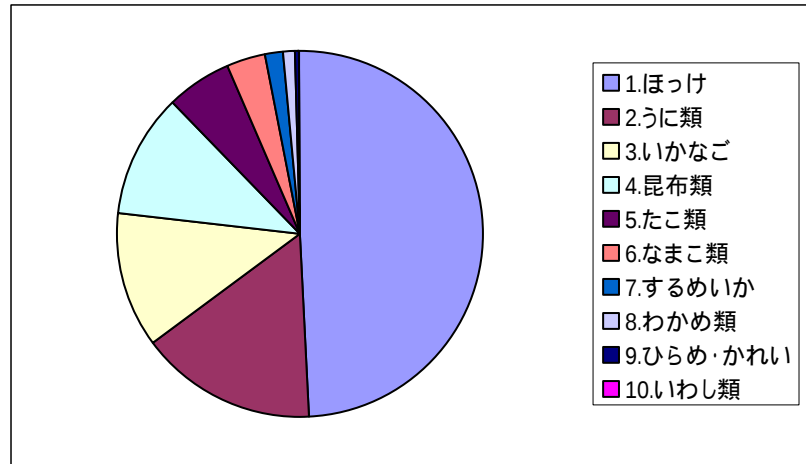
3.1 漁業

漁業はかつてニシン漁で栄えたが資源枯渇により衰退、現在は「利尻昆布」養殖やウニなどの近海漁業が中心。

海に囲まれた利尻町は、古くから海が生活のささえとなっていた。明治になってから、本州各地から鯨、昆布がたくさん獲れる利尻をめざして渡島し、島内に集落をつくっていった。鯨漁は大正時代が最盛期であったが、1955年（昭和30年）を境に獲れなくなった。その後、磯付漁業に転換を図り、現在は栽培漁業や漁場整備などを行い、「獲る漁業」から「つくり育てる漁業」をめざすなど、積極的な漁業振興に取り組み、活力に満ちた産

業によるふるさとづくりが進められている。利尻町は暖流である対馬海流と寒流である千島海流の交差域にあたり、一年を通じて暖流、寒流系の魚類が豊富なことで古くから好漁場の海として知られていた。それゆえに道内はもとより道外からの漁船が集中し、賑わってきた。また海産資源が豊富なことで外国漁船や底引曳漁船の操業が相次ぎ、漁業環境は悪化の一途をたどり、資源の減少が見られるようになってきたのも紛れもない事実である。環境の悪化から利尻町では魚族資源の保護対策として国・道の支援を得て魚礁事業を積極的に推進し、大規模な漁場造成という「海の畑づくり」を目的とした動きも活発であり、主な加工品としては、利尻昆布を使用したダシ昆布、とろろ昆布、昆布醤油のほか、ウニ一夜漬けなどが人気で全国に向けて出荷されている。水産資源豊富な利尻町こそ本来の町の姿なのである。現在の漁獲量は、図 3 のようになっている。ほっけの魚獲量が際だっている。加工品として使用される、ウニ、昆布も高いウェイトを占めている。

図 3 魚種別漁獲量(上位 10 品目)



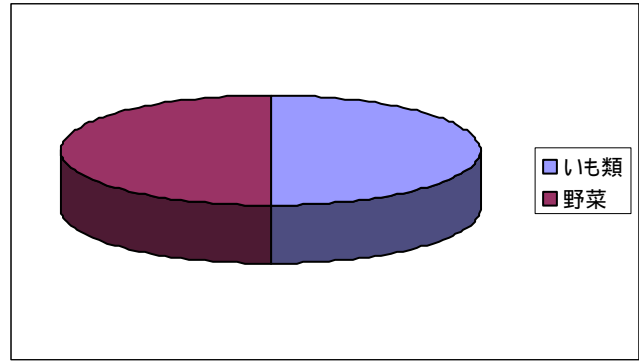
1.ほっけ	1267	6.なまこ類	83
2.うに類	402	7.するめいか	46
3.いかなご	302	8.わかめ類	29
4.昆布類	290	9.ひらめ・かれい	4
5.たこ類	148	10.いわし類	3
		合計	2574

(単位はトン)

3.2 農業

色々と資料を集め、調べてはみたが、海の町として君臨し続ける利尻町では、残念ながら、あまり農業は盛んではないことがわかった。

図 4 利尻町の農業産出額

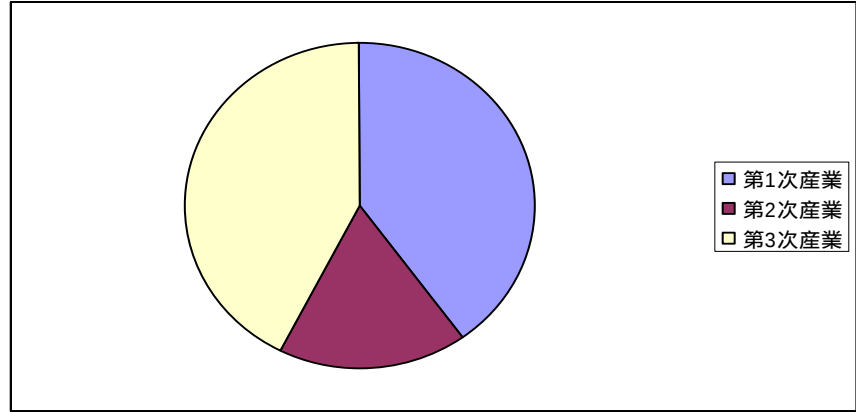


いも類	1 千万円
野菜	1 千万円
合計	2 千万円

3.3 産業別人口

現代の日本では、第 3 次産業に従事する人が多いのは自明で、利尻町もその例に漏れることなく、第 3 次産業に従事する人の割合が最も高いということが、図 4 から読みとることが出来る。第 1 次産業が、僅差で 2 番手である。第 3 次産業従事者の人数にひけをとらない。その理由としては、漁業に従事している人がかなり多いからということがあてはまるであろう。やはり海のまちとして発展してきたというだけのことはある。第 2 次産業従事者が少ないのは、土地の狭さによって工場を建設することが困難であるからであろう。また、首都圏から遠い島に工場を作るとなると、輸送コストが高額になるというリスクを伴う。

図 5 利尻町の産業別人口



第 1 次産業	第 2 次産業	第 3 次産業
836 人	365 人	890 人

第 1 次産業...農業・林業・水産業 etc

第 2 次産業...鉱業・工業 etc

第 3 次産業...商業・運輸通信業・サービス業 etc

4..利尻の自然

季節を告げるために彩る花たち。利尻島の海岸、草原、森林、高山帯には彩り豊かな花々が咲いている。少しだけ紹介。

・リシリヒナゲシ...ケシ科 利尻だけの高山帯の砂礫地にはえる多年草。ケシ属では日本で唯一の自生種。緑色がかった黄色の花が咲く。花期：7月～8月上旬。

・ボタンキンバイ...キンポウゲ科 利尻岳高山帯の中性のお花畑に大きな群落をつくる多年草。花卉のように見えるオレンジ色のがく片がボタン咲きする。近縁な植物はサハリンのカラフトボタンキンバイ、遠く離れてシベリア中央部のアルタイ山脈のアルタイキンバイソウである。花期：7月中旬～8月上旬。

・リシリアザミ...キク科 利尻島の南南東の海岸草原にはえる大型の多年草。リシリアザミは直立した頭花が咲くので本州中部地方から東北地方に分布するダキバヒメアザミに似ている。しかし、頭花の大きさ、総苞片などから区別できる。花期：8月～9月上旬。

【参考 URL】

・北海道庁ホームページ：<http://www.pref.hokkaido.jp/menu.html>

・利尻町役場ホームページ：<http://www.town.rishiri.hokkaido.jp/>